## □はじめに

２００２／２００３年度パブリック・サービス研究分科会は、「専門職としての図書館員養成のために、図書館全般の知識と技能を習得し、そしてそのことが利用者サービスに反映するような、感性豊かな図書館員の育成を目指す」ことを目標として発足した。「司書資格がないのに図書館に配属され困っている方。司書資格はあるが図書館業務に磨きをかけたい方。伝統的な図書館サービスだけでなく、インターネット環境下におけるサービスにも関与したい方など」という応募条件の下、発会当初は２６名（２１大学）のメンバーが集まった。

所属図書館の規模・性格、各人の年齢・キャリアは千差万別であったが、抱える問題意識は共通していた。すなわち、「社会環境の激変、IT 化の急速な進展、少子化、大学改革の影響、国立大学の法人化に伴う競争の激化という現状に、いかに大学図書館が対応すべきか、そしてこれからどのような方向へ進むべきか」。

各大学図書館では、自館の方針について十分な議論もされぬままに、組織の改編や業務の外部化が進んでいる。そのような場当たり的な態度でよいのだろうか。そして、対症療法を行っているうちに、大学図書館そのものの存在意義を失ってしまうのではないだろうか。この危機感は、「図書館員の専門性」という、日本の図書館界において古典的かつ永遠の命題へと収斂されていった。

この問題について、専門職グループでは再三議論が重ねられた。ここで言うところの「専門性」とは、「図書館員は専門職である」という前提から生まれてきたものではない。各々が現在置かれている地点から出発し、分科会の講義を受けることにより触発され、「図書館の果たすべき役割とは何か」ということを真摯に考え、そこで働く図書館員という職業に対する使命感から発した「専門性」への問いである。

本問題に対する明確な解答はまだ出ていない。しかし私たちは、受講した講義の内容を『講義録』としてまとめることにより、解決への手掛かりを模索した。というのも、この『講義録』はさまざまな角度から変革の只中にある現在の大学図書館の姿を映し出している、と私たちは考えたからである。これが、近未来の大学図書館員が習得すべき専門的知識・技能の一覧として参考になればと思う。そして図書館の業務が、このようにいかに高度化しているかということを多くの人々に知ってもらうことによって、大学図書館の職務は専門的色彩が強いという理解・認識に繋がればと願う。

私たちの目指すところは、図書館員は専門職か非専門職か、という二元論で専門性を語ることではない。現実に立脚し、いま大学図書館員がなすべきことを提示することにある。つまり、自大学の方向性に則して、各人が身につけるべき専門性を見極めることである。

私たちの活動が将来の大学図書館の具体的なビジョンを描く一助となれば、幸いである。